

## したたかな吸血生物（その2）

### タネガタマダニ

高田 歩



図1 カナヘビに寄生するタネガタマダニ(左脇の白丸)

タネガタマダニ (*Ixodes nipponensis*) は1967年に北岡茂男先生と斎藤豊先生によって命名されたマダニです。分類群としては、ダニ目マダニ科マダニ属に属します。マダニ科は、幼虫・若虫・成虫（オス・メス）の3期において、種によってさまざまな動物を吸血源として利用する節足動物です。タネガタマダニは、日本に広く分布しているマダニで、人にメスの成虫が吸血していたという事例も知られています。

静岡県では、旗振り法というマダニの一般的な採集方法でタネガタマダニが採集され、野生動物の体からも採取されたことがあります。ただし、その数は決して多くはありません。

マダニの中でもタネガタマダニは、幼虫・若虫のときにニホンカナヘビ（以下、カナヘビ）を宿主としてよく利用することが知られています。逆に言うと、カナヘビから採取されるマダニは十中八九タネガタマダニということになります。

タネガタマダニについては、1970年ごろから2000年ごろにかけて数名のマダニ研究者によって丹念に研究されてきました。それによると、タネガタマダニとカナヘビの分布が重なっていることや、カナヘビが活発に活動する春から秋にタネガタマダニがよく出現すること（幼虫が夏から秋、若虫が春から夏）がわかっています。

さて、2016年4月3日に浜松市の枯山で観察会を実施し、本誌の53号でその様子を紹介しました。その中で、カナヘビにタネガタマダニの若虫が2匹寄生していた（図1）ことを記述しましたが、その日から、私はマダニが満腹に

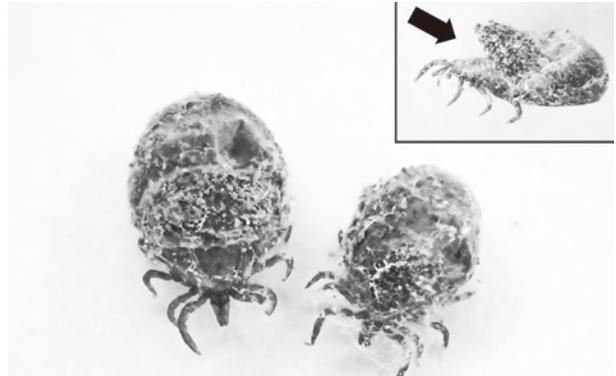


図2 タネガタマダニ若虫の脱皮殻（右上は横からみた様子、矢印が成虫の出口）

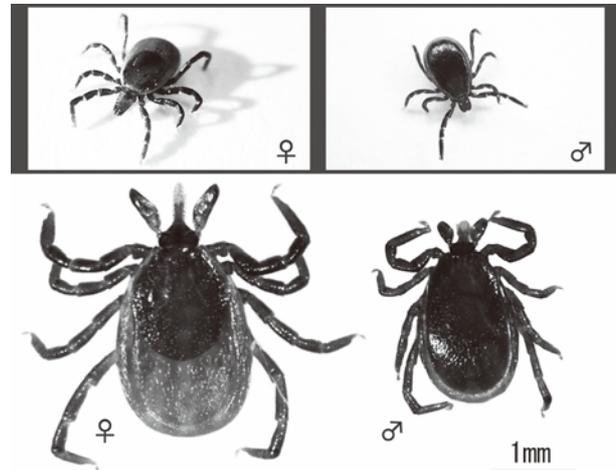


図3 タネガタマダニ成虫の生時（上）と標本（下）

なってカナヘビから離れるまで自宅で飼育・観察していました。

同年4月10日ごろ、マダニが2匹とも脱落していたので回収しました。水で湿らせた脱脂綿を入れた密閉容器に2匹とも入れ、常温で放置しました。マダニが脱皮するまでの間、カビが生えないよう、ときおり脱脂綿を交換しましたが、それでも、吸血してパンパンになったマダニの体からはカビが生えてしまいました。その後、念願叶って2か月後の6月26日、脱皮した成虫（偶然にもオスとメスが1匹ずつ）が確認できました。

脱皮殻はカビだらけですが（図2）、出てきた成虫はよく歩き回って元気でした（図3）。なお、今もそのカナヘビを飼育し続けていますが捕獲当時と変わらず健康です。